opusdei.org

隣人の気持ちをわか る

愛徳を生きるためには、隣人 が心を配るに値する人格であ ることを認め、その人の立場 に立ってものを見る必要があ る。「人格形成」シリーズの 新しい記事を提供します。

2017/01/19

周囲で起こることを本当に理解する ためには、多くの場合客観的なデー タだけを知るだけでは足りないとい うことを経験したことがあるだろ う。例えば、友達のために何かの曲 を演奏したとしよう。自分が大好しなるとしまう。自分が大好したとしまう。自分が大りを なその曲を聞きながら友達は楽しんだかどうかを知りたいと思うださった。 だかどうが、友達が「君の演奏は正確だったよ」とだけコメントして、まして、を 甚びを表さなかったら、落胆いのではないだろうはと悲しくなるのではないだろうか。

もし隣人の心を、つまり彼らが期待 し望んでいることをよりよく知ろこと と努めるなら、人間関係でどれほど の問題がなくなることだろう。 では、『与えること』よりも、その では、『与えること』にある。それと は、その人の言い分を捜して なさい。必ず見つかるはずだ」

(『道』463)。愛徳を生きるためには、隣人が心を配るに値する人格であることを認め、その人の立場に立ってものを見る必要がある。他人

の身になって考え、その人が置かれた状況を理解し、その気持ちを推し量ることを容易にする資質を、英語ではempathyと呼ぶ。この態度は、愛徳と結びつくと、人とのコミュニケーションを育て、聖ペトロの勧めのように「皆心を一つに、同情し合う」(一ペトロ3・8)ことに役立つ。

キリストから学ぶ

を配り、彼らに食べ物がないとそれ を何とかしようとされた。ラザロの 墓の前で泣くマルタとマリアととも に涙を流し、自分たちを受け入れな いサマリアの村を天から火を降らし て焼き尽くそうと提案した弟子たち の心の偏狭さに怒られた。

イエスは模範によって、隣人をどの ように見るべきかを示し、隣人と感 情を共有しその喜びと苦しみに付き 添うように教えられる。イエスを眺 め、周囲の人々の内面に関心を払う ことを学び、恩恵に助けられてそれ を妨げる欠点、すなわち注意散漫、 気まぐれ、冷たい無関心などを徐々 に克服していこう。この努力を中途 半端に終わらせてよいものではな い。「もし信仰生活にふさわしい徳 を獲得していないなら、聖人ぶった 徳を外面的に実行しても、無意味で ある。下着に高価な宝石をじかに飾 るようなものだから」(『道』 409)。主のみ心に近づくなら、私

たちの心を暖かくし、イエスの心のようにすることができるだろう。

愛徳、親切、気持ちの同化

「キリストの愛とは、周囲の人々と 気持よく接したり、博愛主義を標榜 するにとどまるものではありませ ん。神が霊魂に注入される愛徳は、 内部より知性と意志を変え、善を行 う喜びと友情に超自然的な基礎を与 えるものなのです」(『知識の香』 71)。弟子たちが主とまじわり学ん でいくうちに、その気質をなおして いった過程を見ていくことは楽しく さえある。彼らは非常に異なった性 格の持ち主で、時には他人に対して あまり理解を示さないこともあっ た。ヨハネは、兄弟のヤコブととも に雷の子とあだ名されるくらい激し い性格であったが、後年柔和な人物 となり、隣人のことに関心をもち、

キリスト自身がされたように隣人のために自分を捧げる必要性を強調するようになった。「イエスは、わたしたちのために命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです」(一ヨハネ3・16)。

また聖ペトロも、以前はイエスの敵 たちに対して厳しい態度を取ってい たが、神殿に集まった民を前にし て、辛辣さとは全く無縁の言葉をか けて、改心するように励ました。 「兄弟たち、あなたがたがあんなこ とをしてしまったのは、指導者たち と同様に無知のためであったと、わ たしには分かっています。 (…) だ から、自分の罪が消し去られるよう に、悔い改めて立ち帰りなさい。こ うして、主のもとから慰めの時が訪 れ、主はあなたがたのために前もっ て決めておられた、メシアであるイ

エスを遣わしてくださるのです」 (使徒言行録3·17、19-20)。

また聖パウロもよい模範である。キ リスト信者を容赦なく迫害した後、 改心し、自分の明晰な知性と強い性 格を福音のために役立てた。アテネ では、ここかしこに立つ偶像を前に して心は怒りに震えたが、市民の思 いを理解しようと努める。アレオパ ゴスでアテネ人に演説をする機会が 与えられると、彼らの偶像崇拝と退 廃した道徳を責めるのではなく、そ の代わりに彼らも神を心底から探し ていることを指摘する。「アテネの 皆さん、あらゆる点においてあなた がたが信仰のあつい方であること を、わたしは認めます。道を歩きな がら、あなたがたが拝むいろいろな ものを見ていると、『知られざる神 に』と刻まれている祭壇さえ見つけ たからです。それで、あなたがたが 知らずに拝んでいるもの、それをわ たしはお知らせしましょう」(使徒 言行録17·22-23)。人々を理解し自 分からやろうとする気を起こで見た。 人々を起こで感覚した。 気を起こで感覚によった。 の態度には、知性に変立った特徴した。 、知性に変立った。 、知性に変立った。 、対けではいる。 、でようでは、 、でようでは、 、ではいる。 を抱いている。 がに、 、にいるの を抱いている。 を探し出すのである。

真理を愛するための道

隣人を助けようとするとき、愛徳と 柔和な態度を持つなら、人情豊かな 論理で考えるようになり、冷た もずっない議論よりもずっと簡単の ができるようになる。 神の愛によって、私たちは優的生る を保持し、キリスト教の を保持し、キリスト教の がどんなに魅力的であるかを示す とができるようになる。「真の徳は いとわしくも悲しくもない。真の徳とはよろこばしく愛すべきものである」(『道』657)。真理を愛するなら、どんなにゆがんだ心の中にも神の痕跡を認めること可能にするからだ。こうして、各人の長所を発見することができるようになる。

愛徳があれば、友人や仕事の同僚、 家族や親戚と付き合う中で、道を外 れている人に対しても理解を示すこ とができる。彼らが信仰から遠ざ かっているのは、ひょっとしたらよ い信仰教育を受けなかったから、あ るいは福音の真の教えを生きている 人と出会わなかったからかも知れな い。このように考えれば、隣人が正 しい道を歩んでいないときでも、そ の気持ちをわかろうとする心構えを 保つことができる。「私は暴力を振 るう人を理解できません。暴力は相 手を納得させるためにも打ち負かす ためにもふさわしい手段ではないと 思います。誤りというものは、祈り

と神の恩寵と研究によって正すもの です。決して力をもってはできませ ん。常に愛徳をもって、です」(聖 ホセマリア『会見集』44)。いつも 忍耐をもって真理を語る必要があ る。「愛に根ざして真理を語る」 (エフェソ4・15) と言われている通 りである。おそらく今は誤っている が、やがて神の恩寵に心を開くこと ができるようになるかも知れない人 の立場に立つことができなければな らない。この態度は、フランシスコ 教皇の言葉を借りるなら、「足を止 める、他者に目を注ぎ耳を傾けるた めに心配事を脇に置く、道端に倒れ たままにされた人に寄り添うために 急用を断念する、一そのようにした ほうがよい場合がしばしばありま す。時にわたしたちは、帰ってきた 息子がすぐ入れるようにと門を開け たままにする、放蕩息子の父のよう であらねばなりません」(『福音の 喜び』46)。

使徒職と感情の交わり

相手の気持ちになるということを、単なる戦術と考える人もいる品をある人もいる品を表える人がらいる品を明力を表示した。 おり は で は で で は で で は で で は で で で で と で で と で で と で で と で で と で で と は 別物である。

もし周囲の人々にキリストを伝えたいのなら、この誠実さは不可欠で不可欠で下る。神が私たちの近くに置いて下のも大々の気持ちを自分の彼らともに喜び彼らともに苦しむという細やかな愛徳をもっことができる。「だれかがでまずいるなら、わたしは弱らないですが。だれかがつまず

くなら、わたしが心を燃やさないで いられるでしょうかし(ニコリント 11・29)。コリントの信者に対する このパウロの愛のこもった言葉のな かにどれほどの誠実な愛情が見られ ることだろう。このように感情を共 有することができるなら、真理はよ り簡単に伝わっていくことだろう。 というのは、コミュニケーションを 強める、愛情の流れが確立されるか らである。そうなると、魂は、耳が 聞くことをより受け入れやすくな る。それが霊的な生活を改良する建 設的なコメントであればなおさらで ある。

「聞く技術はまず、他者とコミュニケーションの中で寄り添うことのできる心の力で、これがなければ真に霊的な出会いにはなりません。聞くことは、冷めた傍観者としての状態をわたしたちから取り除いてくれる、適切なことばやふさわしい態度を見つけられるよう助けてくれま

す」(『福音の喜び』171)。相手の喜び』171)。相手の言うとを関心をもって聞くをしたいる状況を記したができる。ないっていきるとができる。他方、相手が担にがきるとができる。他方、相手が払わいできる。他方、敬意けるなら、現であるとができる。とになるだろう。相手があることを見て理解であることを見てであることを見てであることを見てであるだろう。

それとは反対に、隣人の事に対する 無関心は使徒的な人にとっては致から の事にいる人の事に対致の のの事に対してある。 周囲にいる人。 のであることはだめである。 のことを良くがでいるでいる でいることが彼らを付いたたりに 考えを変えるだろう。 のだ」(『拓』734)。 隣切、 まない会話などは、相手に対して誠実 な関心を持っていることを表す。好かれる人になることができると、主 との付き合いのすばらしさを分かち 合う友になることが容易になる。

前進することを励ます

このようにすることで、隣人を深く 理解した上で優しく要求するという 主の模範に従うことになる。復活の 日曜日の午後、エマウスの弟子たち

に付き添われたとき、彼らにこう尋 ねられた。「歩きながら、やり取り しているその話は何のことですかし (ルカ24・17)と。そうして、彼ら がどうして心を消沈させていたか や、主が復活されたという婦人たち の伝言をなかなか信じられないこと などを語るままにさせて、彼らの心 の重荷を下ろさせた。彼らが話すだ け話してから、主は口を開かれ、 「メシアはこういう苦しみを受け て、栄光に入るはずだったのではな いか | (ルカ24・26) と説明され た。

イエスはどのような話しをされたのだろうか、どのようにしてエマウスの二人の弟子の不安に答えられたのだろうか。ともかく彼らは最後に「一緒にお泊まりください」(ルカ24・29)と言った。最初には預言者たちの言うことを理解しないと言ってしかられたにも関わらず、である。ひょっとしたら、声の調子や優

ハビエル・ライネス

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/rinjin-no-kimochi/ (2025/11/19)